

鶴つる
「初日影」はつひかげ



伊万里 志田焼
江戸後期 一尺一寸皿

このお皿を初めて目にした時、その全体的な構図と共に、霞からもれる「日脚」の美しさ、その表現の巧みさに、思わず見とれてしまいました。

お皿の絵には、古来、長寿の象徴として尊ばれてきた「冬鳥の鶴」が、空に一羽舞い遊び、地上には、六羽群れております。そこに「難を転じる」として賞でられる「南天」の赤い実が添えて描かれ、さらに、目出度い兆しの「瑞雲」がなびいています。

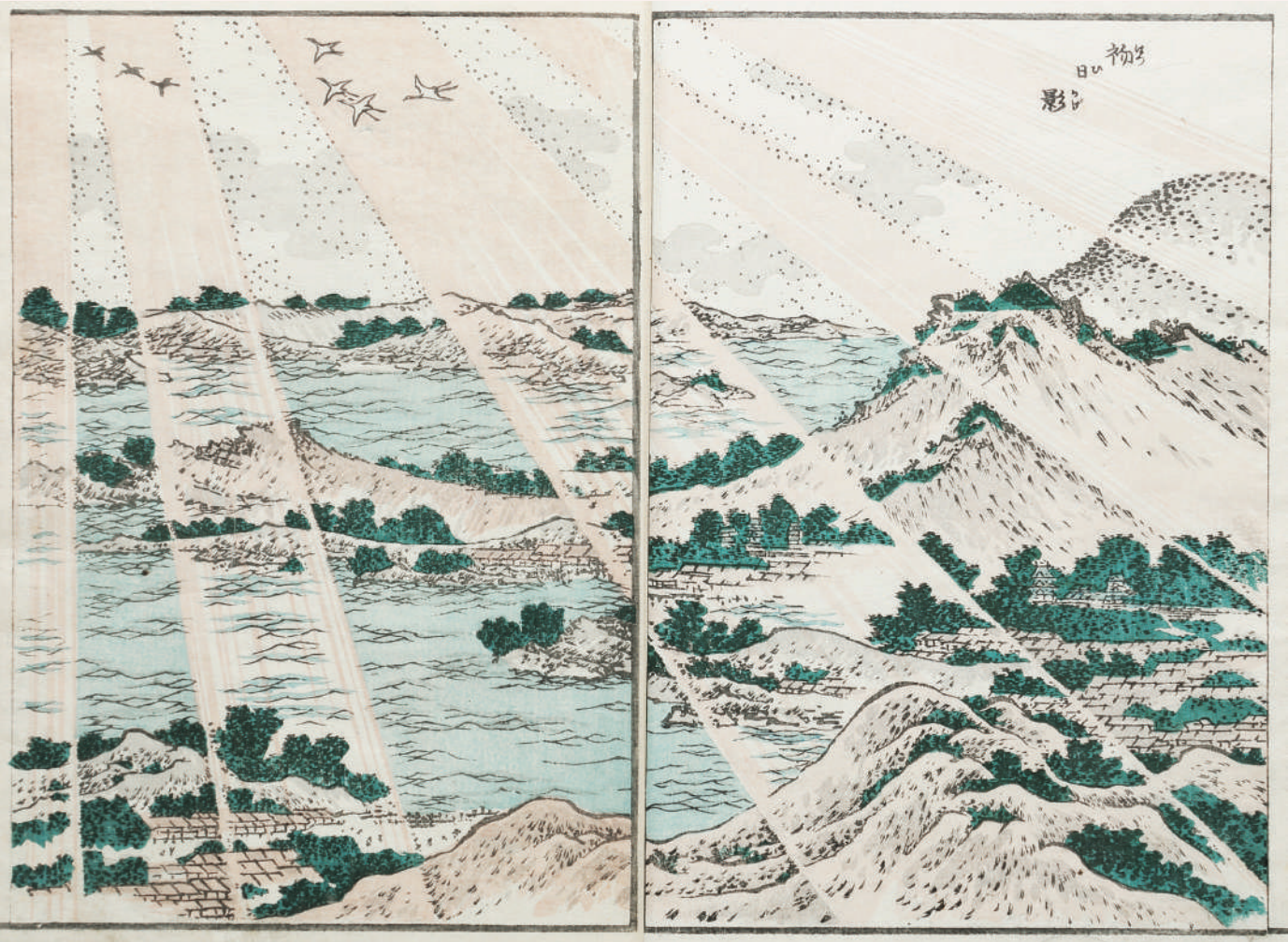
ところで、南天の実は、お正月に生け花などとして飾られます。そこで、「朝日」に「鶴」に「南天」となれば、目出度き元旦の「初日の出」であろうと推考いたしました。

このお皿を手に入れた頃は、橘守国画伯などの、江戸中期に出版された絵手本を中心に、絵解きをしておりました。その後、「北斎漫画」など、北斎翁などが出された江戸後期の絵手本でも調べるようになりました。

さて、嘉永二年（一八四九年）に編纂された「北斎画譜下編」（改訂前原題「良美麗筆」）に、見開き全体に「日脚」を描き、その中に鶴が舞い飛び、下の方には、家並と共に、人影が細やかに描写された絵が載っておりました。そしてお題は、「初日影」と有りました。

これで漸く、絵皿の意味の裏付けもとれ、絵解きとしては、一安心でございます。

そして、絵手本の「遠景」を、お皿に「近景」として描かれた絵師の感性は見事です。



葛飾北斎画「北斎画譜 下編」(嘉永二年・一八四九年)

二羽の寿帯鳥に寿石「代々長寿」

鳥



伊万里 志田焼
江戸後期 一尺三寸皿

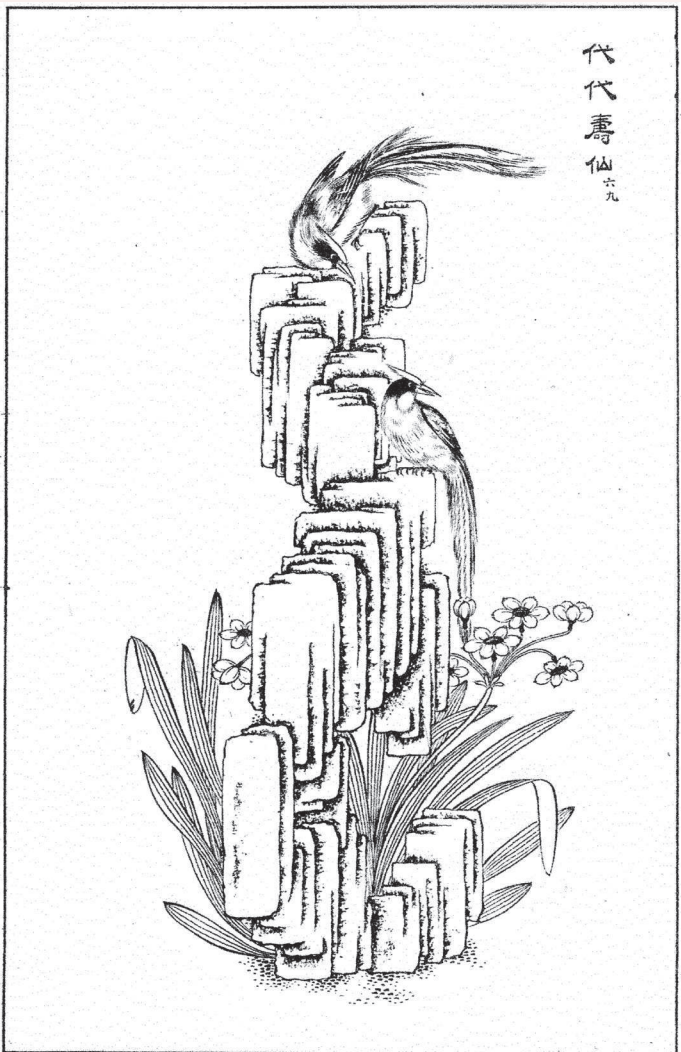
練鵲の別称は寿帯鳥（「綬帯鳥」とも）でございます（47、50ページ参照）。このお皿の絵には、その寿帯鳥が二羽、何やら不思議な石の上に止まっております。これまた長らく、その意味が分からぬままでした。ところが、その絵の説明が「吉祥図案解題」（昭和十五年・一九四〇年刊）に、次のような内容で記されておりました。

「寿帯鳥は二羽で、帯々。帯は代と同音で、『帯々』は『代々』に通じる。『石は寿命が長い』ため『寿石』で、長寿にたとえ、吉祥を祝う絵である」。

そこで、このお皿の絵の画題は「代々長寿」という訳でございます。因みに本の絵には、水仙が描かれ、「代々寿仙」と題され

ており、その意は「代々仙人の如く長寿である」でございます。

さて、この「吉祥図案解題」は、とてつもなく秀逸な内容の本で、江戸絵皿の絵解きの迷いを、このような図柄と説明文により、



代々壽仙 六九

「吉祥図案解題」
（昭和十五年・一九四〇年）

いくつも解きほぐす事が出来ました。それとこの中国に渡られ、明治、大正から昭和時代にかけての数十年前、仕事の傍らに図案を蒐集され、その暗示されている意味を、膨大な時間をかけて解いてゆかれたのでございます。この偉業は、図案の源である中国の現地に、おられたからこそ出来た事で、物事の成立の条件と言われる、「場所と人と、時間及び費用」が相まつての事だと存じます。そして昭和三年（一九二八年）に初版を出版され、その後も研究を続けられ、それらを補い昭和十五年（一九四〇年）に再版をされました。

私も野崎先生に倣い、手間や金銭に執着せず、江戸絵皿の庶民文化を、未来の世の子孫に伝えるべく、全六巻の完結まで、生き続けるつもりでございます。

甲辰 四月 七十六歳

雁「雁の見返り」

鳥



伊万里 志田焼
江戸後期 一尺一寸皿

このお皿に描かれた鳥の姿と、そっくりの絵が、寛政元年（一七八九年）刊の「頭書増補訓蒙図彙」の中に載っております。

鳥の姿の向きは、左右逆なのですが、裏から透かして見ると、もうそのもので、鳥の名は、「雁かり」とありました。しかし、その姿は前かがみで、それが何を意味しているのかは、解けぬままでした。

ところが、享保六年（一七二二年）に出版された「画筌」の中に、鳥の姿の一覧図が描かれており、同じような前かがみの鳥の姿の説明には、「頭をさげて、あとを見る勢（姿）」と書かれておりました。

水鳥の足には水掻きがあり、水上では方向転

換がたやすく出来ても、地上では、歩くのですらおぼつかないため、素早く後ろを見る時は、このような姿勢をとるのでございましょう。

因みに、雁の上に出ている月は、「中秋の名月」の「十五夜」（旧暦八月十五日）ではなく、

雁の来る時期からすると、十五夜の次に美しいとされている、旧暦九月の「十三夜」の「後の月」と思われます。「十五夜」は、収穫した里芋を供えるため「芋名月」、そして栗を供える「十三夜」は、「栗名月」とも呼ばれております。



林守篤画「画筌」
（享保六年・一七二二年）



（左右を反転）
下河辺拾水画「頭書増補訓蒙図彙」
（寛政元年・一七八九年）



染付 伊万里 志田焼
江戸後期 尺皿

「一路功名」は、画題でございます。お皿の絵では、「一羽の鷺」に柳を配したものが多いようで、その場合は、「柳鷺」とも呼ばれております。

そして「一路功名」の意は、一羽の鷺の「鷺」を「一路」に掛け、「一筋の路を、一歩一歩すすんでいけば、必ず身が立つ」との事です。

さて、ここに同じ構図の、二枚のお皿があります。偶然にも、同じ年に見つけたもので、「色絵」のものは、「本焼きされた染付（青絵）の皿」を、「赤絵屋」に持ち込み、再び色を加えて「二度焼き」にしたもので、上等な品として、人々の目を楽しませました。



いろえ 伊万里
志田焼
江戸後期 尺皿

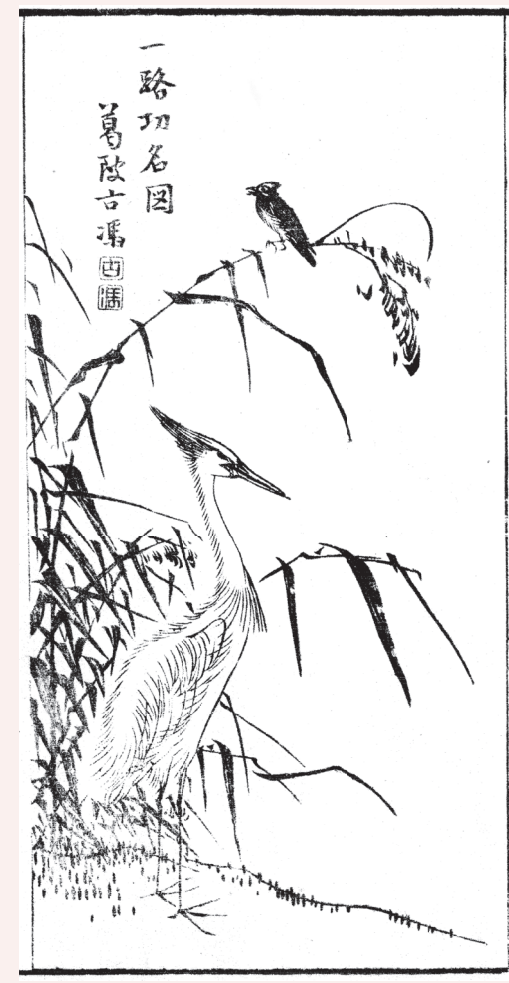
このような「一路功名」のお皿を、身近なところに飾り、日頃から眺めていけば、おのずと焦る事も少なくなり、心は落ちつく事でございましょう。

「座右の銘」の「座右」とは、身近なところの意で、「銘」は、深く戒めとする言葉ですが、このお皿の絵にも「心の養生」の「銘文」として、「一路功名」が込められております。



葛飾北斎画
「北斎漫画 二編」
(文化十二年・一八一五年)

一路功名図
大原東野写画「名数画譜」
(文化七年・一八一〇年)



孔雀 「孔雀に九徳あり」

鳥

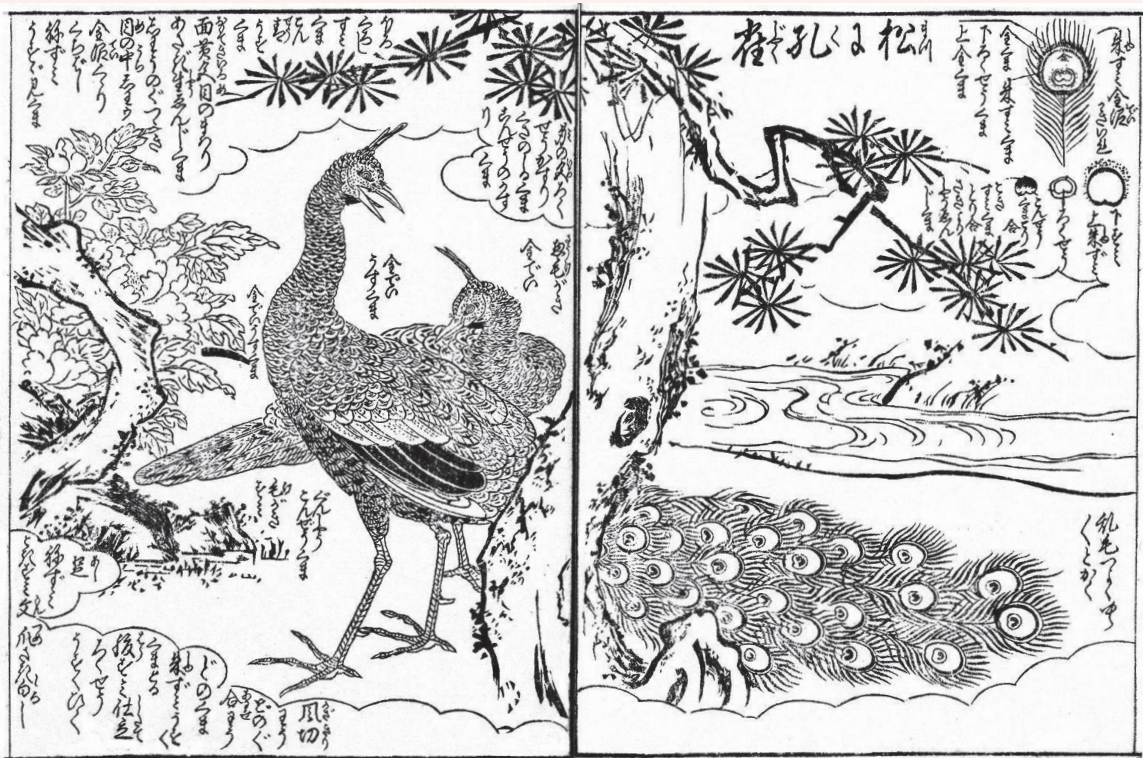


伊万里 志田焼
江戸後期 一尺二寸皿

孔雀は、そのずば抜けた華麗な姿から、古今東西で愛でられ、描かれて参りました。そして、中国の古典、「易経」（紀元前成立）に、「孔雀に九徳があり」と、謳われております。その九徳とは、

- 一、「美しい顔つき」。
 - 二、「冴えた声」。
 - 三、「慎んだ足取り」。
 - 四、「時と場所による、美しい振る舞い」。
 - 五、「謙遜な食べ方」。
 - 六、「自足」。
 - 七、「共存」。
 - 八、「喧しくない」。
 - 九、「常に戻る」。
- でございます。

それにしても、先人の、自然からの学びには、



橘守国画「絵本写宝袋」
(享保五年・一七二〇年)

感心するばかりでございます。そして、ここでの「自足」とは、「やたらに欲しがらず、足る事を知る」の意で、老子の説かれた「知足者富」（足るを知る者は、富む）に通じております。お皿に描かれた孔雀は、睦まじそうで、そのお手本となった絵が、橘守国画伯の「絵本写宝袋」（享保五年・一七二〇年刊）に載っておりまして。その孔雀の絵を見ますと、顔付きばかりでなく、脚の配置まで、そのまま見事に写されております。

さて、九徳のうちに、それをしないと、人様に迷惑をかけるものが、一徳ございます。それは「喧しくしない」。そこでまずは、これを真似てみようかと思っただ次第です。

「幸せとは、人に迷惑をかけない自己満足」。これで、「共存」も成立いたします。



伊万里 志田焼
江戸後期 尺皿

仙人は、「道教」(老子が祖)において、「理想とされる人物」でございます。俗界を離れて山中に住み、長年にわたり修行された結果、「長生不老の法」を修められた方々で、空中飛行など、様々な神通力を持つとされております。秦・漢代(前二二二年)には、道家(後に道教)の道士によって仙人になるための法が実践されたようで、その仙人の伝記をまとめた、「列仙伝」(後漢・二五年〜二二〇年)や、「神仙伝」(晋代・二六五年)が編纂され、今に至っております。

さて、このお皿の絵の鯉に乗られた仙人は、江戸時代に有名だった「琴高仙人」でございませう。そして、「列仙伝」では、この方の事が、次のように記されております。



吉村周山編 狩野元信原画
「和漢名筆画英」
(寛延三年・一七五〇年)

「琴高は、趙(紀元前・戦国時代)の人であった。よく琴を弾いたので、宋の康王(???)前二八六年)の舍人となった。涓子や彭祖の術を実践し、冀州・碭郡の地方を放浪すること二百余年。のち、碭水に潜って龍の子を取ってくると言い遺し、かつ弟子たちと約束して、当日は、みんな潔斎して水辺で待ち、祭場を設けておくようにと伝えた。すると、果して赤い鯉に乗って現われ、水から出て祠の中に坐した。翌朝には、多数の人がこれを見にやって来た。こうして、一月あまりも滞在していたが、再び水中に入って去った」。

酒井抱一編 尾形光琳画
「光琳百図」
(文化十二年・一八一五年)



さて、絵皿の構図によく似た絵が、江戸中期に「吉村周山」が出された絵手本の、「和漢名筆画英」(寛延三年・一七五〇年刊)に載っておりませう。この絵は室町時代の、「古法眼」の異称で知られる、狩野派の大成者「狩野元信」(一四七六年〜一五五九年)の原画

巨靈人
「洪水を防いだ河の神」



伊万里焼
江戸後期 七寸皿

の写しで、鯉の顔や目、そして人物などの全体の表情が真に豊かに描かれております。

それにしても、紀元前の仙人を、一七〇〇年後の室町時代の絵師が描かれ、また、その絵を手本として三〇〇年後の江戸後期の絵師が、庶民の使うお皿に描かれたのは、夢を見るような思いがあったからでございましょう。それから二〇〇年後の現代、その絵の仙人を知る者は、ほぼおられません。しかし陶磁器は、もともと土であるが故に劣化することがなく、縄文土器のように、千年万年と確実に絵を残せる唯一のものでございます。

出来得るならば、千年万年後まで、庶民文化であった絵皿の絵解きが、何らかの形で伝えられている事を、望むばかりでございませう。

今の世で、このお皿に描かれた人物を知る人は、もうほとんどおられません。ところが、そのお手本とされた絵が、橘守国画伯の出された「絵本写宝袋」(享保五年・二七二〇年刊)に、載っております。

そして、そこには説明書きがあり、その文の意味は次のようなものでございます。

「巨靈人は大力で、神通力のある仙人である。『古文前集』という本には、巨靈人は山を劈て河の水を流し、洪水を尽きさせた。又、白虎を愛す」。

伊万里焼
江戸後期 一尺一寸皿

また、「絵本写宝鑑」(貞享五年・一六八八年刊)



いまり しだやき
伊万里 志田焼
明治前期 尺皿



いまり しだやき
伊万里 志田焼
江戸後期 尺皿



いまり やき
伊万里焼
江戸後期 五寸皿



たちぼなもりくに えほんしゃほうぶくろ
橘 守国画「絵本写宝袋」
(享保五年・一七二〇年)

には、「華山千万重、大ちからにて、山を引
きくずすと成り」と書かれておりました。

古来、巨霊人は、中国伝説の「河の神」と
して、崇められてきたようです。そこには、
洪水に悩まされ続けてきた人々の、切なる思
いが込められていたのでございましょう。

さて、守国画伯の絵は、彫物師の方々もお
手本とされたようで、東京の雨武主神社に、
ほぼその物の彫刻が残されております。

それにしましても、それぞれの職工の方々
の模写の技量には、驚かされます。そこには、
「真似」をして「学ぶ」の、「迷いのない安心
感」が感じられます。

麻姑「痒いところに手が届く」

仙人



鹿背山焼
銅板絵付

幕末～明治初期 五寸皿

幕末期に焼かれた山城（京都の南部）の、鹿背山焼のお皿や鉢には、なんとも不思議な人物が描かれているものがごさいます。鹿背山焼の事を記した文献を見ましても、その人物の名前が書かれたものはなく、長年どなたなのか、解らずじまいでした。

ところが江戸後期に、北斎翁より三歳年下の、「谷文晁」の絵を集めて出版された、「文晁画譜」（文久二年・一八六二年刊）に、お皿の絵と同じような、花籠を担い鹿を連れた女性を描かれており、その方の名を色々と調べたところ「麻姑」とありました。

麻姑は仙女で、伝えられるところによりまずと、「歳の頃は、十八、九の美しい娘」で、鳥のように「長い爪」をしているとされてお

葛飾北斎画「北斎漫画三編」
（文化十二年・一八一五年）



ります。また麻姑は、長寿の象徴でもあります。また三月三日の西王母の誕生祝いの「蟠桃会」には、靈妙な働きのある茸の「靈芝（万年茸）で作った御酒」を献上される、この事でございます。

さて、とある男が「麻姑の長い爪で、背中を搔いてもらえたら気持ちがいいだろう」と思ったところ、麻姑の兄がその心を見抜き怒りました。この話から生まれた道具が、背中などを搔くのに用いる「麻姑の手（まごの手）」で、決して「孫の手」ではありません。

辞典にも、慣用語として、「麻姑を倩うて痒きを搔く」があり、その意味は、「神仙伝（麻姑）」「物事が思いのままになること、物事がよく行きとどく事を言う。麻姑搔痒」と記されておりました。

それにしましても、どうしてこの絵をトレードマークにされたのか、それは、「鹿背山」と言う地名と「鹿の絵」に、糸口があるのでございましょう。



谷文晁画「文晁画譜」
（文久二年・一八六二年）



伊万里 志田焼
江戸後期 尺皿

江戸時代における、蝦蟇仙人とは誰なのか、それには二つの説があり、定説の「劉海蟾」(214ページ)の他に、「侯先生」の説がございました。その事を橘守国画伯が、「絵本通宝志」(享保十四年・一七二九年刊)の中で、「侯先生、世に蝦蟇仙人ト云、此人ナルベシ」と記され、劉海蟾説を否定されておられます。

そしてこの事は、日本でも和刻された「有象列仙全伝」(和刻本 慶安三年・二六五〇年刊)におよそ次のような物語が記されております。

侯先生は、何れの所の人なのか、よく分からない。宋の大中年間、都で薬を売っていた。年は四十余りで、髯や眉がない。身体にいぼが見える。

馬元と言う人、夏の月夜に、侯先生に随つて城外に出かけた。侯先生は、池で水浴をはじめた。馬元がこっそりと覗きこむと、なんと大きな蝦蟇になっていた。

馬元は、退き隠れた。侯先生は、服を着てから馬元に、「あなたは私の姿を見ましたね」と笑って言われた。

その後、連れ立って居酒屋へ行き、そこで侯先生は、馬元に一粒の薬を与えられた。そして、「これを飲めば、百歳まで生きられる」と言い残して姿を消された。

さて、この物語の絵が「絵本写宝袋」に載っておりますので、ご覧下さい(次ページ)。そしてお皿の絵は、「絵本通宝志」をお手本にしたものと、見て取れます(どちらも守国画伯の絵)。



侯先生
世に蝦蟇仙人ト云此人ナルベシ
列仙傳 侯先生眉髭ナシナリ

橘守国画

「絵本通宝志」

(享保十四年・一七二九年)



葛飾北斎画
「北斎漫画 三編」
(文化十二年・一八一五年)